南信の思い出

研究参与　　加藤 幸三郎

昨年夏、「カンテンパパ」や「ＫＯＡ森林塾」を見学して大いに知見をうることができた。帰途、松本経由で鹿教湯温泉に二泊して、上田に出て、大学時代の旧友たちと再会した。

初日、信州大学での共同研究会に出席後、浅間温泉の「旅館 東石川」に一泊した。土蔵作りの宿といえば、何時だったか、私がゼミ学生を連れて、まだ温泉の出なかった頃の秋田・田沢湖畔のわらび座に泊り、「鬼剣舞」を鑑賞できたのは良かったが、部屋の温風器で参加学生二、三名が咽喉をやられ、角館の宿へタクシーで移動したものの、これが土蔵の宿で熱発組の看病に苦労したのを思い出した。さらに、回想は続く。実は、この宿の息子さんが、わが大学を受験したとのこと、差し入れの「ビール」で乾杯、是非合格をと祈ったが、後でそれが夢だった苦い経験がある。

さて、今夏の南信州の「成長企業」を見学して、「寒天」の調査・研究といい、森林経営といい、私には南信特有の「進取に富んだ気性」が存在するのでは？と想像を逞しくした。

というのも、後述する今は亡き古島先生の著作集刊行のお手伝いで『古島敏雄著作集』（第７巻・月報７）に短文「南信の山なみ」（1983 年３月）を書かされたことがある。1970 年代前半に、内田義彦先生や石渡貞雄先生、当時の高橋七五三学部長たちの努力の甲斐あって、東大定年後一時早稲田大学に移られた古島先生を本学にお呼びすることが出来た。周知のように、戦後歴史学において、一つの主流をなした「日本地主制史研究」を切り拓き・主導された古島先生に、私は最初の「長期留学」でご迷惑をかけてしまったことも、先生自身の「十年間の略年譜」（前掲、『古島敏雄著作集』第七巻、349 頁以下）に記されている。

先生の戦前の著作（『信州中馬の研究』、同『著作集』第四巻）でもあるが、「江戸時代において、有効な河川舟運の方法を持たなかった」信州は、広大な地域との交通は総て陸路によらねばならず、しかも江戸幕府によって管理された五街道の一たる中山道が、いわば信州の東北隅から西南隅にわたって、略々対角線上に通過しており、さらにこの中央部のやや南にある下諏訪へは、五街道の一の甲州街道が延びてきており、中山道の追分宿からは、北国街道が分岐して上田・善光寺を通過している。・・・さらに松本から伊那郡を南北に縦断して岡崎・名古屋に出る伊那街道・三州街道があって人馬物資の通路となっている。中山道・甲州街道・北国街道は勿論、その他の街道にも宿駅或いは馬継場の設けがあり、後者の場合には、地方諸侯の藩用の人馬・物資の運搬のために伝馬役を負担しているのである。このような藩用のための伝馬を

負担した街道と、幕府直轄の五街道とが、まず諸商品荷物の輸送路となったのであるが、江戸時代の商品流通の発展は、或いは直接これらの街道を通過しながら、街道の運輸規定を無視する駄賃稼ぎを発生させ、或いはそれらの街道をも避けて、間道を開発して商品を運搬する駄賃稼ぎ発展させた。遂には明和元（1764）年に、これら駄賃稼ぎは幕府によって公認され、「中馬（チュウマ）」とよばれる特殊な機能をもつ馬背運輸業者が成立して、山間部における経済発展の貢献するにいたった。この成立の過程は正に宿駅に設けられた諸街道・問屋との抗争の過程であり、同時に新興商業資本の、街道宿駅による運輸との抗争の過程でもあった。まさに、信州一円を通じて中馬慣行が公認され、宝暦九（1759）年以降中馬と馬継場問屋との争いに端を発して、全伊那街道馬継場・中馬稼ぎ村方をも巻き込み、さらに松本・飯田の商人たちをもその渦中にまきこんでゆくのである。荷物としては、「竹タガ・串柿・煙草・麻・木地・焼酎殻・糸荷・まゆ・油粕」が主要な商品で、関東・奥州からの「蚕種・生糸・絹織物・紅花」なども伊那街道を利用するにいたるのである（古島敏雄「江戸時代における商品流通と交通」{『近世日本農業の展開』所収、東大出版会、1963 年刊}）。

このように、地理的・自然的条件を極力利用・活用しつつ、社会的・歴史的条件を切り拓いて行く、その精神的基盤が、現在のこの「成長企業」にも引き継がれているのではなかろうか？私的なことだが、幸運にも、病的な身体をいたわりつつ、院生時代に中信の豊科町（松本市の隣町）の歴史的調査を通じて、有賀喜左衛門先生から初めて歴史研究の手ほどきを受けることが出来たのである。その後、ドクター・コースを受ける要件として、「清瀬村」で約一年暮らした。運良く大学院復帰が出来、暉峻先生の指導で手術後の身体で南信飯田市（いうまでもなく古島先生の故郷である）に隣接する毛賀村の調査にも参加できた。この村は、歴史的には「水引」生産で有名であり、戦後農地改革が進むなかで、農民運動の展開が活発な地域でもあった。その折、宿で（ローメンならぬ）「五平餅」に舌鼓をうったが、風呂からあがって、部屋の廊下の手摺りに手拭を干すまでに、パリンパリンに凍ってしまった記憶がいまでも脳裏から去らない。古島先生の『著作集第七巻』の「月報」で「南信の山なみ」を記したのも、寒いと同時に、「明るい南信」が進取の気性に育まれていたことへの憧憬が私の心底にこめられていたのかもしれない。